

町田市有林の広葉樹をシイタケ原木に！ 町田市・NPO 法人・JA・シイタケ生産者との連携

1 テーマの趣旨・目的

東京都では古くから原木シイタケ栽培が行われてきたが、平成 23 年の東日本大震災における原発事故により、シイタケ原木の一大産地であった福島県からの移入が途絶え、原木価格が上昇した。一方、里山として利用されてきた広葉樹林は、薪や炭の需要の減少、シイタケ生産者の高齢化等に伴って人手が入らなくなり、高齢・大径木化している林が多い。このままではナラ枯れ被害等の拡大や獣害を誘引する懸念がある。広葉樹を整備し伐採木を利用することで、東京都産のシイタケ原木を増産し、広葉樹林の循環や更新につなげることを目的とした町田市の市有広葉樹林における NPO 団体との連携を報告する。

2 現状及びこれまでの取組の成果・課題

(1) 現状

① 東京都におけるシイタケ生産の実態

東京都のシイタケ生産者数及び生産量は減少傾向にある。平成 24 年度に大きく減少しているのは、平成 23 年に起きた福島第一原発事故に起因する放射性物質の影響と思われる。

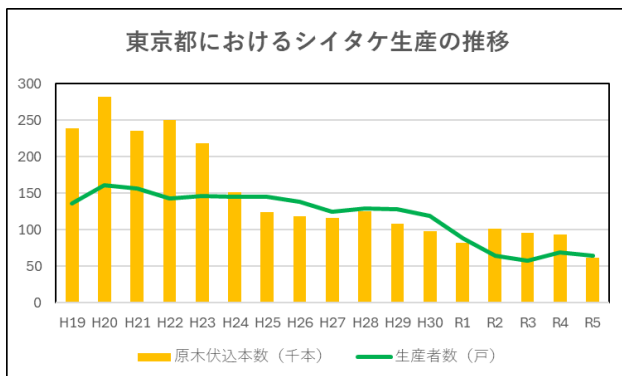


図-1 シイタケ生産の推移

令和 6 年度に実施した「原木シイタケ生産等の実態調査」によると、依然として原木による生産者の割合が 80%以上を占めている（54 人中 45 人）。

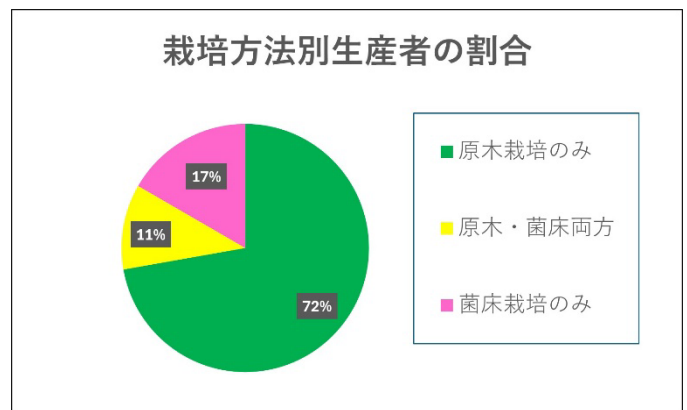


図-2 栽培方法別シイタケ生産者の割合

原木所有規模別に生産者数を見てみると 600 本未満の生産者が半数近くを占めており（45 人中 20 人）、生産規模が小さいことが顕著となっている。

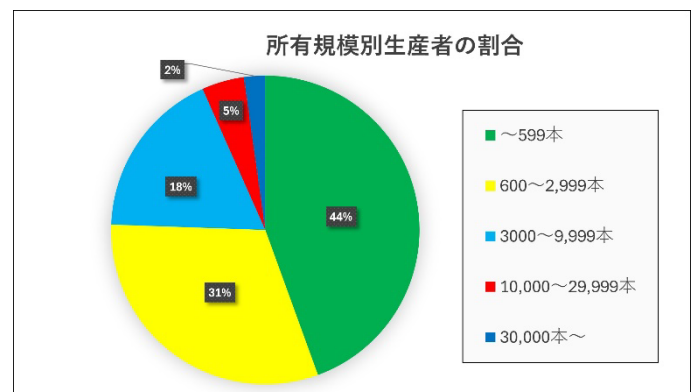


図-3 原木所有規模別シイタケ生産者の割合

原木調達地域を見てみると東京都産は 10%（5,465 本）に過ぎず、71%を山梨県産が占めている（38,440 本）。

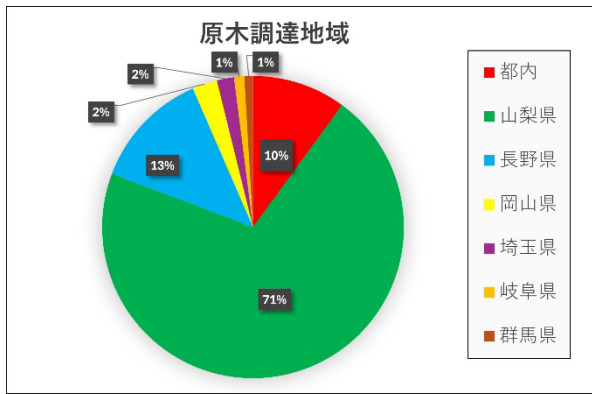


図-4 原木調達地域

以上のことから、東京都におけるシイタケ生産は原木栽培による方法が主流であること、その生産規模は零細であること、原木調達はほとんどが山梨県をはじめとする他県産に依存していることが明らかである。

一方、本調査の結果、自伐シイタケ生産者も都外原木供給者も、高齢化やナラ枯れ等により原木の生産・供給が困難になってきている実態も明らかになった。

② 町田市 の概況等

今回紹介する取り組みは、町田市の市有林で行った。町田市は、東京都の最南端にあり（島しょ部を除く）、神奈川県横浜市・川崎市・相模原市と隣接している。都心（新宿・渋谷）や横浜へは電車で約30分とアクセスが良好である一方、多摩丘陵と相模原台地にまたがり平地が少ないため、自然が豊富で里山や公園、農地が点在している。鶴見川・境川・恩田川など水源が豊富で、農業が盛んで地元野菜の直売所も多く、地産地消が進んでいる。令和6年度の調査によると、町田市のシイタケ生産者数は5戸で、東京都内の生産者数(55戸)の区市町村別順位では5番目となっている。

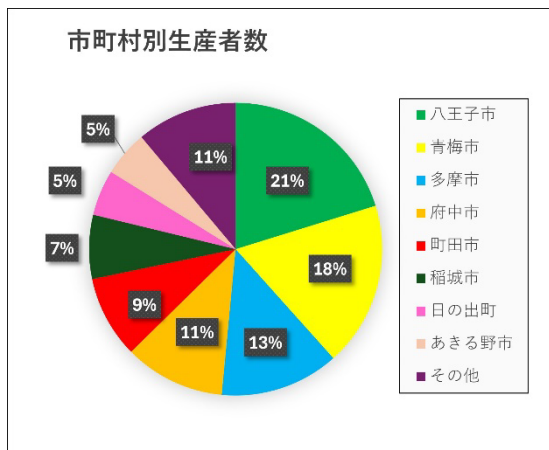


図-5 市町村別生産者割合

町田市の森林面積は778haで市全体の面積の11%となっている。広葉樹の割合が高く(72%)、「町田市里山環境活用保全計画」を策定して持続可能な里山づくりを目指している。

一方、古くから市民活動も活発で、NPO法人「鶴見川源流ネットワーク」は20年ほど前から町田市有林を借りて整備し、植生・生物生育調査やイベントを実施している。さらに15年ほど前から地元の小学校と連携して、3年生ではクヌギの苗づくり、4年生は市有林内を散策、6年生になるとクヌギの植栽を行うなど子供たちへの木育活動も行っている。



写真-1 小学3年生による苗づくり



写真-2 小学6年生による植栽

クヌギを植えるのは、管理している町田市有林をオオムラサキの繁殖地とするため、谷部にはオオムラサキの幼虫のエサとなるエノキを植えている。植樹したクヌギ等が大きくなり間伐の時期を迎えたら、市民を募って間伐を実施している。

なお、同NPO法人理事長の岸由二氏は、慶應義塾大学名誉教授で、自然環境の保全や防災を、行政区域にとどまらず、川の流域単位で解決する「流域思考」を提唱し活動を続けている方である。



写真－3 市民参加の間伐

(2) 取組内容

シイタケ原木の伐採搬出・運搬に係る経費が高騰していることから東京都では支援を開始しているが、普及担当としては都内での広葉樹整備による原木供給とシイタケ生産者との需要をマッチングすることでシイタケ生産者の経営力強化を図りたいと考えている。

そこで、市有林の広葉樹整備を行っている町田市農業振興課の里山担当に相談したところ、市有林から出た材を市内シイタケ生産者に提供してもいいという、色よい返事をもらうことができた。メールや電話での調整を重ね、町田市の担当による計らいで、NPO 法人「鶴見川源流ネットワーク」（以下「NPO 法人」という）を紹介してもらった。そこで、普及担当は同市内のシイタケ生産者の団体である JA 町田市椎茸部会に説明し、町田市の担当立会いの下、両者をマッチングし連携を促すことができた。その後、令和 6 年 11 月 22 日に現地調査を行ったうえで、令和 7 年 2 月 23 日に NPO 法人が実施する市民参加の間伐体験イベントで伐採した材をシイタケ原木として利用する運びとなった。対象の森林は、平成 25 年（2014 年）に植栽したクヌギ・コナラ林である。クヌギの苗木が足りず、購入したコナラ苗も植えたクヌギ・コナラ林である。NPO 法人に、都内のシイタケ生産者ではクヌギよりコナラを使うことを説明したところ、昨年度からコナラ苗を作るために小学生にコナラの種を植えさせるようにしてくれた。



写真－4 現地の下見

(3) 成果

令和 7 年 2 月 23 日（日）、町田市有林で実施した NPO 法人主催の市民参加の間伐体験イベントに、NPO 法人、町田市の里山担当職員、東京都森林事務所普及担当、JA 町田市椎茸部会の会員である生産者、事務局である JA 町田市職員が同行し、イベント参加者が伐採したクヌギやコナラをシイタケ原木として利用できるようなこぎりやチェーンソーで玉切った。玉切った材を集めて普及担当が本数を確認したところ、全部で 102 本であった。量としては多くはないものの、今までは切り捨ててしまっていたクヌギやコナラの材をシイタケ原木として生産者へつなぐことができたことは貴重である。その後、小型不整地運搬車に積み込み、トラックまで運搬した。搬出を考慮に入れた整備がされていないため、路面状況があまりよくなく、途中で転倒しそうになりつつも、なんとか運び出すことができた。



写真－5 普及担当確認の様子



写真-6 不整地運搬車へ積み込み

ってもらおう仕組み作りも検討したい。

今後も市町村・NPO 法人・JA・生産者・林業事業体等様々な組織との連携により、広葉樹の整備とシイタケ生産者の経営力強化に向けたマッチングを進めていきたい。

(4) 課題

町田市有林の広葉樹整備は今後も続く予定ではあるが、間伐した材を玉切って運搬することができる生産者の確保が困難である。今回はシイタケ生産者の1人が伐採・搬出を行うことができたが、高齢化や人手不足により、人材の確保が課題となっている。なお、JA 町田市椎茸部会以外の生産者にも連携の輪が広がり、伐採・搬出の手が少しずつ増える可能性がある。

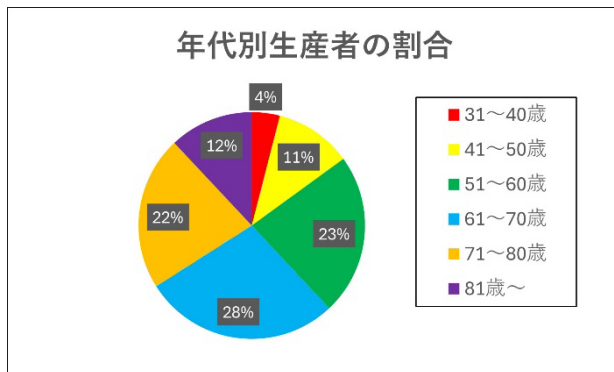


図-6 年代別生産者割合

3 今後取組むべき内容

今回の取組の際、町田市内の福祉施設からもシイタケ原木提供の要望があったことから、JA 町田市椎茸部会以外の生産者にも連携の輪が広がり、伐採・搬出の手が少しずつ増える可能性がある。また町田市だけでなく、整備が必要な広葉樹林は東京都内にも多数存在していることから、普及担当としてマッチングの対象を広げていく必要がある。シイタケ生産者自らが伐採搬出を行うことが困難である場合には、林業事業体等に担い手とな